

4. 芳町

芳町(Yoshicho) は日本東京のある地名であり、徳川時代(1603~1867) には“蔭間”——かげま(Kagema) ——の集まる場所であったので、諷刺の風俗詩“川柳”では芳町という二字は彼女たち(?)の代名詞とされた。日本の蔭間は、琴言のように学士大夫に賞せられることはなく、訪れるのは大抵が武士道の武士、医者に扮した和尚、(医者はたいがい僧形、黒い袈裟と剃髪である。出家ということにはならないけれども)、および大名家の女官である。文学上では特に論文・小説があり、韻文では“川柳”がしょっちゅう言及するが、その他の歌や俳句ではいささかこれを避けて言うを憚る。古川柳に一句次のようなものがある。

Seni harao Kaete Yoshicho Kiakuo tori

つまり最後の一項——女の客をもてなすことを言うのだが、文句はあまり直訳に都合よくない。明治維新以来、こうした風雅の伝統は遂に絶え、現在の“俳優”は大抵が演芸専門である。わたしは光緒の末年(1906)に初めて北京に来た時に、まだこの目で蔭間たちの風采を見ることができたが、二度目(1917)に来た時には見なかったようだ。中野三允の著『古川柳評釈』(本年六月出版)を見ると、芳町に関する一句の下に、坂井久良岐の次のような注釈がある。

“‘川柳’の芳町は、男色の蔭間茶屋が主である。明治の頃百尺という酒楼があったが、つまりそうした伎楼の一つの旧跡である。支那の役者には蔭間が多い。近々梅蘭芳の劇を見て、一句を得た。

Pekin-kara kite Yoshicho no Iro-o mise”

大意は、はるばると北京からやってきて、われわれに芳町の色相を見せてくれた、というものである。原本はもっと簡練だが、翻訳して意を達そうとすると、長ったらしくなってしまう。久良岐は日本の新“川柳”の“大師”で、世に定評があるが、眼光はやや古臭いようで、そういう風に言えば、おそらく中国の梅派の恨みを大いに買うことだろう。——この点はどうも残念なことで、いささかかの老先生には申し訳ない。久良岐のくせはどうやらあまりよくないようで、もし我々が廢姓外骨がその『変態知識』(川柳研究月刊、今はすでに停刊)で言うところを信ずるならばだが、紹介者の面では中国人の恨みを買った責任は負わざるを得ない。

※初出：1925年10月12日『語絲』第48期